

はなたれ小僧さま

熊本県

むかし、山奥の村に、貧乏なおじいさんが住んでいました。毎日山に入って薪をとっては、町へ売りに行きました。

ある日のこと、おじいさんは、いつものように薪を売りに行きましたが、買ってくれる人はいませんでした。

町のまん中を川が流れていて、橋がかかっていました。その橋を何度もわたって、町じゅう歩きましたが、薪は売れませんでした。おじいさんは、くたびれて、橋の中ほどで休みました。そうして、薪をぜんぶ、橋の上から川の中へなげこんでしまいました。それから、竜神さまをおがんで、帰って行こうとしました。

そのとき、川の中から、見たこともないような美しい若い女が出て来ました。女は、腕に小さな小さな子どもを抱いていました。そして、おじいさんと呼びとめていいました。

「竜神さまが、薪をたくさんもらってたいへんよろこんでおられます。お礼にこの子どもを預けるとおっしゃっているから、つれて帰りなさい。この子どもは、はなたれ小僧さまといって、おまえの願うことは何でも聞いてくださいます。そのかわりに、毎日三度ずつエビのなますをこしらえて、小僧さまにお供えしなくてはなりません」

女は、はなたれ小僧さまをおじいさんにわたして、水の底に帰って行きました。

おじいさんは、大よろこびで小僧さまを抱いて、村に帰りました。そして、小僧さまを神棚の横にすわらせて、たいせつに育てました。

おじいさんが、お米でもお金でも、なんでもほしいと思うものをたのむと、はなたれ小僧さまは、すぐにふうんと鼻をかむ音をさせました。すると、すぐに、おじいさんの前にお米やお金やらが出てきました。おじいさんが、

「もっと大きくて新しい家を出してください」というと、小僧さんは、ふうんと鼻をかむ音をさせて、美しいりっぱな家を出してくれました。

「倉を出してください」というと、倉が出ます。おじいさんは、たちまち大金持ちになりましたもう山へ薪を取りに行かなくてもよくなりました。おじいさんの仕事は、毎日エビのなますをお供えすることだけになりました。

ところが、日がたつうちに、おじいさんは、毎日町までエビを買いに行くのがめんど

うになってきました。

ある日のこと、おじいさんは、はなたれ小僧さまを神棚からおろしていました。

「はなたれ小僧さま。わしはもうおまえさまにお願いすることは何もありません。どうぞ竜宮にお帰りください」

これを聞いて、はなたれ小僧さまはだまって外へ出て行きました。そうして、しばらくのあいだ、すうつと鼻をすする音をさせていました。すると、家も倉も何もかもがひとつずつ消えて行って、しまいには、いぜんのあばら家だけが残り<sup>のこ</sup>ました。

おじいさんは、これはたいへんだ、ひきとめようと、いそいで外へ飛び出しましたが、はなたれ小僧さまのすがたはもうどこにもありませんでしたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『柳田国男全集 25 日本の昔話』柳田国男／筑摩書房